

# 諏訪

## 旧制諏訪中で太陽黒点の観測続けた教師

# 三沢勝衛の観測記録

# 最新天文学に貢献

旧制諏訪中学（現諏訪清陵高）の地理教師だった三沢勝衛による1921（大正10）34（昭和9）年の太陽黒点の観測記録が、太陽活動の長期変動をひもとくためのデータ改良に役立つ可能性があることが分かった。信州の美しい星空を観光や教育に生かそうと官民が進める「長野県は宇宙県」連絡協議会が5日、発表した。名古屋大の早川尚志特任助教らが中心に論文にまとめ、英国の王立天文学会月報に今月掲載される。



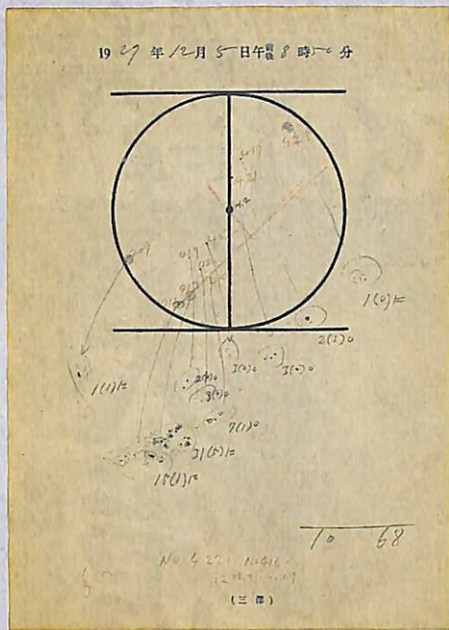
三沢勝衛（遺族提供）

黒点観測は1610年から400年以上続く人類の科学観測の中でも最も長い歴史を持つ分野の一つ。複数の観測者の記録を補正しながらまとめた「国際黒点相対数」を指標に、最新の数理モデルを当てはめるなどして太陽の過去

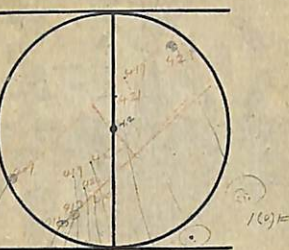
の復元や将来予測をしている。第1次〜第2次世界大戦の戦間期は、基幹観測所だったスイス・チューリヒ天文台以外のデータがほぼ残っていないことに加え、観測者ごとにばらつくデータの校正にも課題があった。黒点スケッチなどの原典に基づいた指標の見直し作業が国際的なプロジェクトとして進行している。

三沢は白内障で左目を失明するまで、学校にあった3センチ望遠鏡で14年余り観測を継続。諏訪地域は晴天率が高い

1929年12月5日の太陽黒点のスケッチ（三沢勝衛先生記念文庫所蔵）



1929年12月5日午後8時〜9分



Handwritten notes and numbers on the diagram, including '100%', '20%', '30%', '40%', '50%', '60%', '70%', '80%', '90%', '100%' and '100%', '20%', '30%', '40%', '50%', '60%', '70%', '80%', '90%', '100%'.

（三沢）

## 名古屋大助教ら論文 英国の学会誌に掲載へ

こともあり、1カ月平均で25・4日間と高頻度で太陽を見ている。

諏訪清陵高内の「三沢勝衛先生記念文庫」では三沢の黒点観測データを保管していた。このデータを同連絡協議会のほか、高校生や一般市民らが一緒になって整理、解析した。緻密で継続的なデータは貴重で国際利用できると結論づけ、早川特任助教らが中心に論文をまとめた。

現代では通信や電力網などに悪影響を及ぼす恐れがある「い」と話している。



三沢が観測する太陽

太陽フレアの発生を予測する宇宙天気予報や太陽による候への影響などから太陽活動の観測が重視される。三沢は日本で体系的な黒点観測を行っていた先駆者で、早川特任助教は「三沢のデータが国際的に使われていないことに疑問があり、研究に興味を持った」とする。同協議会長の大西浩次・長野高専専任教授は「100年がたった今、三沢が太陽にかけた志や情熱が活用できることが素晴らしい」と話している。

三沢勝衛 1885（明治18）年、更級郡更府村（現長野市）に生まれる。1920年、旧制諏訪中学（現諏訪清陵高）に赴任。教科書を使わず、自身の調査研究データなどを用いた独自の授業で地理などを教えた。37年に52歳で死去。

その土地固有の風土を発見し生かすことが産業振興につながることを説いた「風土論」でも知られる。教え子に考古学者の藤森栄一や天文学者の古畑正秋、作家の新田次郎らがいる。同高には三沢の著書や論文、太陽スケッチなどの他に蔵書約1万2千冊を所蔵する三沢勝衛先生記念文庫がある。教え子が中心となって結成した諏訪天文同好会は昨年創立100周年を迎えた。